

参考資料紹介

児童文学と「ことば」：図書館から考えるためのブックリスト

国際子ども図書館資料情報課長

岸 美雪

0 はじめに 児童文学とことばと図書館の関係

“児童文学とは何でしょうか。作者という大人と、読者である子どもがことばによってコミュニケーションをする、あるいは、大人から子どもへ、ことばによって文化を伝達する装置といえるかもしれません。”

いくつかのキーワードの連鎖

児童文学と作品

作品とことば

ことばと識字

識字と読者

読者と読書

読書と本

本と図書館

図書館と児童サービス

児童サービスと児童

児童と児童文学

1 「ことば」と児童サービス

「こども」か、「本」か

子どもと本にかかわる仕事をするようになって、30 年以上経ちますが、仕事を始めたころと現在とで、考え方が大きく変わった点がひとつあります。それは、以前は子どもの読書を考えるとき、「本」に関心が集中していたのが、今では「読者」の方に注意が向くようになったことです。（中略）

本やお話は、つまるところ、ことばでできています。私たちは、ある本がおもしろいとか、ある人の語る話がおもしろいかいいますが、それは厳密に言えば、ある本を読んだとき、あるいは、ある人の語る話を聞いたとき、読み手、あるいは聞き手が、ことばを手掛かりに、自分で自分の中にイメージをつくりあげ、そのイメージが描き出す物語世界をおもしろいと感じていることなのです。

書き手や語り手は、自分の中にあるイメージ―考え、思い、感情などをよりよく伝えようと、ことばを選び、表現に工夫をこらします。その上手下手がおもしろさを決めます。でも、そのおもしろさは、読み手や聞き手に受けとめられ、たのしまれるまでは、おもしろさにならないのです。読み手や聞き手は、書き手や語り手がさし出すことばを自分の力でイメージに変えます。こうしてイメージの送り手と受け手がことばを通してつながり、互いにひとつのイメージを共有することができたら、そこに共感が生まれ、コミュニケーションが成立する、つまり、おもしろいと感じることになるのだと思います。読書というのは、そういう営みを繰り返して自分を肥やし、自分の中に自分らしい世界を築きあげていくことなのだと思います。そして、その読書の質を決めるのは、本のよしあしと同じくらい重要な、読み手のもつ「ことばをイメージに変える力」だといえましょう。

松岡享子「ことばの贈り物」（『ことばの贈りもの』 所収）

子どもという読者とことばの力について、1970 年代の後半からの読者である子どもの変化を指摘。「本」「作品」よりも、「子ども」「読者」について考察する必要性がある。

2 子どもというもの

歴史的にみた「子ども」という概念

子どもが子どもとして扱われるようになったのはきわめて近年のことである・・・

柄谷行人「児童の発見」（柄谷行人『日本近代文学の起源』所収）

3 子どもと「ことば」

“大人のことばと子どものことばには、大きなへだたりがあります。ことばのへだたりは、思考や感受性の違いにもつながります。”

発達心理学の分野の成果からみる「子ども」の特徴、発達課題

とりわけ、認知の発達、特に、言語機能の発達の解明

4 関連する領域

“ことばによって文化を伝達する装置”

「子ども」の部分を取り出すのではなく、全体としての研究領域

1) ことばと文字

人間社会全体の中で、ことば イコール 文字ではない、ということの問題提起。

記録や伝承は必ずしも文字ではない。無文字の社会、声の文化と文字の文化の連続性・断絶性の検証

文字化されてからの音読、黙読

2) ことばと識字

社会生活に必要な力としての「識字」「リテラシー」

ことば、特に文字の取得を、帰属する民族における母国語の取得という点から考察
言語の理解と読書の能力との関係

3) 読者と読書

まず読書ありき、ではなく、「人が読む」という点での考察の代表例

ものを読む人、かならずしも、読者ではない

読む活動、リーディングと読者とは、一応区別して考えなければならない。読者とい
うものがまずあって、リーディングを行う、というのではない。まず、リーディングと
いうことが行われ、そのうちに、自分を意識するリーディングが生まれるようになり、
そこではじめて、読者が成立するのである。

外山滋比古「読者の誕生」（外山滋比古『近代読者論』所収）

日本の文化史にひきつけた研究例：

日本の近代文学の誕生と「読者」の誕生、「近代読者」という概念

明治以降の日本での「読書」の歴史研究

より広い文脈のなかでの「読書」「読者論」

5 読者としての子ども

“ことばのへだたりを越えて、大人と子どもがコミュニケーションできるかどうか”

1) 発達を軸に

子どもの認識段階と「読者」としての発達

読書（ないしは読書の力）の客観化を志向

2) 文学を軸に

諸分野の問題提起への模索

文学と教育との距離と関係性の構築にむけて

3) 教育を軸に

文学教材の「読み手」「読者」は誰か

教師の「読み」、子どもの「読み」

文学教材は「教材」か、「作品」か

4) 実践の場から

子どもたちの読書の場として、児童サービスの実践例をみた場合の事例研究

6 児童文学研究の進展

『研究 日本の児童文学』

日本の児童文学を、テーマ別の通史として 5 巻で構成。近代以前から 2000 年代までの
主な論点から分担執筆した研究史。

『現代児童文学論集』

第二次大戦直後の 1946 年から 1989 年まで、43 年間の児童文学批評・研究の中から時

代のポイントとなる重要な評論を精選し、年代別に収録。5 巻からなる。半世紀にわたる児童文学の流れを研究文献に基づき把握できる論文集かつ資料集。

**7 児童サービスにおけるにおける「こども」と「ことば」：公共図書館での理論
“子どもたちに「ことば」を届ける仕事としての児童サービス”**

読者としての児童

利用者としての児童

(参考) 青少年の読書と指導/児童と青少年の読書活動

読書指導と滑川道夫、阪本一郎

1960 年代を中心とした発達段階モデル → 読者論にたった再構成の可能性